

# 第16回 すまいるフェスタ in たかもり



11月6日(日)、高森中学校吹奏楽部の演奏を先頭に高森駅から高森総合センターまで行われた人権パレード。今年も『すまいるフェスタ』が行われました。

センター内では「健康づくり推進大会」・高森町文化協会による「文化祭」も兼ね、健康・芸術にかかわる各種表彰や、それらの展示品のほか茶道・舞踊の披露といった文化発表がありました。午後には、東北楽天イーグルスの田尾元監督による講演があり、満席となった会場で聴衆はテンポの良い話に引込まれていました。

この『すまいるフェスタ』のメインテーマである『人権』について綴った小・中・高校生による人権作文は、身近に起きた人との関わりについて相手の立場を理解し、それぞれの視点で感じたことを朗読発表したものです。発表者の思いがこもった作文は、胸に突き刺さり、『人権』について改めて考えさせられました。

今号で、第36回全国中学生人権作文コンテスト熊本県大会・NHK熊本放送局賞を受賞した高森中学校3年・中山さつきさん(高森・昭和)の作文をご紹介します。また、この表彰式が12月17日(土)「ハートフルメッセージ2016」として熊本県立劇場で執り行われる予定です。

## おばあちゃんとおたまりレー

高森中学校 三年 中山さつき

私の祖母は今年米寿を迎える。遠方に住んでいるのでたまにしか会えないが、会うたびに、視力が落ち耳が遠くなっていることを感じていた。

私は、去年行った修学旅行のお土産をまだ渡していないことに気が付き、急いで宅急便で送ることにした。そこに同封する手紙を書こうとしたら、母が「字は大きく黒々と書かんとおばあちゃんは見えないよ。」と言ったので、スケッチブックから破り取った大きな紙にマジックで大きく黒々と書いた。

数日後、祖母から電話がかかってきた。話の内容はこの前送ったお土産のお礼だった。特に同封していた手紙については「涙が出るほどうれしかった。よく見えたよ。」と言っていた。私はそれを聞いて少し驚いた。手紙の文字を大きく書いてだけでこんなに喜んでくれている。むしろお土産よりも嬉しそうにしているのがある。なぜなのかわかえてみた。

ふと以前も同じ経験をしていたことを思い出した。

去年の福祉体験のときのことである。私たちのグループはあるリハビリセンター兼老人ホームに行くことになった。私は身内以外の高齢者と正面から接したことがあまりなかった。それに、「福祉」という言葉にも何か特別なものを感じていた。

初日と二日目は施設全体の見学、一階のリハビリ施設での見学や食器洗いなどを体験し、最終日の三日目を迎えた。この日は上階の老人ホームでの研修であった。

朝のあいさつ、朝食、私たちの自己紹介をへて、レクリエーションのおたまりレーが始まった。おたまを持ってきた入居者の皆さんが二列で向かい合って椅子に座り、私たちが先頭の入居者のおたまに次々とボールをのせていき、それを入居者の皆さんがバケツリレーのようにして向こう側にあるバケツまで運び、二チームでその早さを競うというゲームだ。私たちは椅子を並べて入居者の皆さんにおたまを渡していった。

ほとんどの入居者の方はこちらが渡すと自ら手を伸ばして受け取ってくれるのだが、一人だけ様子がおかしい方がいらした。こちらがおたまを渡してもうつむいたままなのである。すると職員が一人がこちらに来て、「○○さん、今からおたまりレーするよ。」とその人におたまをもたせ、「○○さん、今日は中学生の人がついとるから大丈夫だね。」と話している。どうしたのだろうか、と私が当惑していると、その職員の方が私を少し離れたところに連れていき、小声でこう言った。

「あの方は目が見えないので、そばについてサポートをお願いします。」

私は動揺した。目が全く見えない人と出会ったのはこれが初めてだ。しかもその人のサポートを頼まれたのだ。一体どうしたらいいんだろう……。色々な考えを巡らせながら、私はその人の所に戻った。その人はひどく申し訳なさそうな顔をして「私はやらない。」とくり返していた。自分の目が見えないことで周りに迷惑をかけていると思っているようだった。私はとにかく「大丈夫です。楽しいですよ。」と言って彼女を元気づけることに努めた。

そうしておたまりレーが始まった。私は次々と運ばれてくるボールが彼女のおたまにうまく乗るようサポートし、「赤いボールが来ましたよ。」とか「ほう、うちのチームが勝ってますよ。」と、彼女には見えない全体の様子を説明していった。とにかく彼女が他の入居者の皆さんと同じようにゲームを楽しめるようにしたかった。

ゲームが終わり片付けが始まったとき、ふと彼女を見ると彼女は涙を流して泣いていた。私はとても驚き、何か悪いことをしたのかと心配になった。そばに来ていた職員の方も驚いたようで、「どうしましたか？気分悪いですか？」と尋ねた。すると彼女は「どこも痛い訳じゃないよ。私ね、この子がね、ずっとそばにいて話してくれたがね、すごく嬉しかったんよ。」と言った。そのとき私は気付いた。「福祉」は決して特別なものではない。

「福祉」とは、社会に生きる人々の生活上の幸福という意味らしいが、私は今それを表現できたのだと思った。どうすれば相手が幸せになるかを考えるだけでいいのだ。これは福祉だけでなく全てに於いて大切なことだと思う。私はこの人を幸せにできたのだ。嬉し涙を流す彼女を見て、私の目にも涙が溢れた。そうか。そういうことだったのか。

祖母は、目がよく見えない自分がどうしたら手紙を読めるかを考えてくれた私達の気持ち、とても嬉しかったのだろう。私はそれが分かってとても清々しい気分になった。

私はまた祖母に手紙を書こうと思う。画用紙に大きな大きな黒い字で。

## 人権

### 人権問題

児童虐待について

〜おわりに〜

1年にわたって、『児童虐待』について特集しました。「児童虐待」というのは決して遠い世界で起っている事ではなく、現実世界において今この時も、私たちの身近な場所で起こりうることです。

時折、TVや新聞等で報道されますが、それはほんの氷山の一角であり、児童相談所には毎年何万件もの報告事例があるのが現実です。

「児童虐待」は子どもたちに身体的にも心理的にも取り返しのつかない傷跡を残し、時にはその生命をも脅かす事態を招きます。

核家族が進み、それぞれの家庭内の事情に目につきにくい現代。「児童虐待」を防ぐために私たちができることは、少しでも虐待の可能性を感じたら最寄の法務局、役場、県の福祉事務所、児童相談所等へ勇気を持って通報することだと思います。

